

“恥ずかしくない医療”を行う矜持

国立病院機構浜田医療センター呼吸器内科部長 柳川 崇

全科・全重症度の患者が集まる基幹病院

鳥根県は東西に長く、県東部を出雲地方、県西部を石見地方^{いわみ}といい、それぞれに方言や気質が異なります。当センターの位置する浜田市は石見地方の中心にあたりますが、医療資源は鳥根大学医学部附属病院や松江赤十字病院のある出雲地方のほうが充実しているというのが現状であり、石見地方では各地域に基幹病院はあるものの27診療科・365床を有する当院がもっとも大きな総合病院ということになります。また、石見地方は東西に広いため、浜田市からは高速道路でつながる広島県のほうが交通の便がよく、患者さんの紹介先も出雲地方よりも広島市の病院を希望される方のほうが多いくらいです。

石見地方でひと通りの治療が完結する病院が当センターのみであることから、科によっては近隣の江津市や益田市の基幹病院からも専門的な治療を必要とする患者さんが送られてきます。また、浜田市では救急対応をしている病院が当センターのみであるため、全科・全重症度の患者さんが当院に集まるという点が大きな特徴といえます。都市部であれば様々な規模の病院があり搬送の時点で患者さんが振り分けられるため、大きな病院の救急外来は重症であることを前提に診療を開始することになると思いますが、当院では実際には受診の必要もないような軽症の方も少なからず救急外来を訪れます。軽症から重症、珍しい病態まで様々な患者さんが訪れる中で、診断を下して必要

な治療を見極める判断が求められるわけです。当院の救急を2ヵ月も経験すれば研修医はとても頼もしく成長します。

当直は全科当直で、当直医が対応できないものについては各科の救急待機の医師に連絡をとり駆けつけてもらうことになります。

1ターンの鳥根の地に

私はもともと神奈川県の生まれで、1990年に金沢大学医学部を卒業後は東京大学附属病院と日本赤十字社医療センターで研修を行いました。初めはリウマチ・膠原病内科を志望していましたが、研修中に呼吸器グループと関わりを持つ中で、レントゲン写真を見ながら30分にわたって語り合ったり、人工呼吸管理を必要とする重症患者さんを扱ったりする呼吸器内科に憧れを抱くようになり、志望を変更しました。呼吸をせずに生活できる生き物はこの世にいませんから、呼吸という生命維持のために必要不可欠な行為について深く学ぶことは面白いはずだと考えたこともこの道を選んだ1つの理由です。また、当時も今も内科の中で病態や治療、創薬についての研究が遅れている領域は呼吸器であると思っています。病因が解明されておらず克服できない疾患が多いということは、裏を返せばこれから学び解明しなければならないことが多くあるということです。

東京には12年間いましたが、うち9年間を日本赤十字社医療センターで過ごし、呼吸器内科の面白さのすべてをそこで教えていただきました。当